

『論語私存』 訳注 (十一)

水野 実・阿部光麿・大場一央・松野敏之 編

凡例

- ・ 底本は、北京市国家図書館蔵『四書私存』（明嘉靖二十二年刻本）を用いた。ただし先進第十一篇には落丁があり、二十五章の前半のみ朱湘鈺点校、鍾彩鈞校訂『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所、二〇一三年六月）を用いた。
- ・ 原文において判読出来ない字は□で表記した。
- ・ 書き下しにおいて、『論語』本文における□は「」で示した。
- ・ 書き下しにおいて、季本注における□は、類推できる場合は「」で示し、校異を附した。
- ・ 季本『説理会編』は、清華大学図書館蔵明馮繼科刻本（四庫全書存目叢書所収）を用いた。
- ・ 校異および解釈には、前掲『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）を参考として用いた。

論語私存卷十一

會稽季本箋釋

先進第十一

【一】

子曰、先進於禮樂、野人也。後進於禮樂、君子也。如用之、則吾從先進。

先進、後進、猶前輩、後輩。以仕而在位者言、故謂之進。禮樂就見於日用者言。在位即是君子、君子則有文采章於民上。但前輩雖進而在位、却質朴無文、與田野未仕之民無異、故直謂之野人。若後輩則文采備矣。文采備、故直謂之君子。非以時人之言如此、而孔子述之也。用之、謂用禮樂以爲治也。蓋文采備則質朴者漓、不若先進崇本尚實、而淳風未至於斷喪也。蓋禮與其奢也、寧儉之意。

〔訓読〕

子曰く、先進の礼樂に於けるは、野人なり。後進の礼樂に於けるは、君子なり。如し之を用ふれば、則ち吾、先進に従はんと。

先進、後進は、猶ほ前輩、後輩のごとし。仕へて位に在る者を以て言ふ、故に之を進と謂ふ。礼樂は日用に見はるる者に就いて言ふ。位に在るは即ち是れ君子、君子は則ち文采の民の上に章かなる有り。但だ前輩、進みて位に在ると雖ども、却て質朴にして文無く、田野の未だ仕へざるの民と異なる無し、

故に直だ之を野人と謂ふ。後輩のごときは則ち文采備はれり。文采備はる、故に直だ之を君子と謂ふ。時人の言ふこと此のごとくなるを以てして、孔子、之を述ぶるに非ざるなり。之を用ふとは、礼樂を用ひて以て治を為すを謂ふなり。蓋し文采備はれば則ち質朴なる者漓なり、先進の本を崇び実を尚びて、淳風未だ斷喪に至らざるに若かざるなり。蓋し礼は其の奢らんよりは、寧ろ儉せよの意なり。

〔語釈〕

○禮與其奢也、寧儉 『論語』八佾・4章。

【二】

○子曰、從我於陳蔡者、皆不及門也。德行、顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語、宰我、子貢。政事、冉有、季路。文學、子游、子夏。

孔子追思從陳蔡者之不及門。蓋相從於患難、非心服孔子者不能也。故記者特舉顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、子游、子夏言之、而揭德行、言語、政事、文學以名科、見其皆成德達材之士。不然安能保其當厄而不忍棄去哉。不忍棄去、然後謂之心服。孟子謂七十子之服孔子。自七十子之外、少有人焉、則心服亦難矣。○德行、以成德爲行也。言語、以說辭發揮聖人之道、次於德行者也。政事、雖所見不及言語者之精深、其才則能達於事爲者也、故又次之。文學、則才或不能有爲、但於文義中講求亦有所得、故又次之。○四科所列十人、皆從陳蔡者、非以此十人爲獨哲也。唐開元禮祀孔子、以

此十人爲十哲。其後顔子升侑、而以曾子補之。曾子升侑、而以子張補之。則所謂十哲者、皆臆見也。景定之禮、以顔曾思孟爲四侑、議者猶以顔路、曾皙、伯魚並列其下爲未安。金仁山乃欲據古堂事之制、如庠序之禮、先獻酬而後燕、以牲幣旅陳享先聖、而南面於堂、繼以顔曾思孟爲侑、用燕禮、籩豆、簠簋奠先聖、而東向於室、以顔路、曾皙、七十子左右拾食、如昭穆之列。竊謂此亦未知拾食之禮非可擇賢而侑於室者也。拾食如昭穆、亦與列於兩廡何異哉。若因此而得其意、則亦不患於無處矣。

〔訓読〕

○子曰く、我に陳蔡に従ふ者、皆な門に及ばざるなりと。德行には、顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語には、宰我、子貢。政事には、冉有、季路。文学には、子游、子夏。

孔子、陳蔡に従ふ者の門に及ばざるを追思す。蓋し相ひ患難に従ふは、孔子に心服する者に非ずんば能くせざるなり。故に記す者特に顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、子游、子夏を挙げて之を言ふ、而して德行、言語、政事、文学を掲げて以て科に名づけ、其れ皆な成徳達材の士を見^{しめ}す。然らざれば安んぞ能く其の厄に当たりて棄去するに忍びざるを保たんや。棄去するに忍びず、然る後に之を心服と謂ふ。孟子、七十子の孔子に服すと謂ふ。七十子よりの外、人有ること少な^{まれ}れば、則ち心服も亦た難し。○德行は、成徳を以て行を為すなり。言語は、説辞を以て聖人の道を發揮す、德行に次ぐ者なり。政事は、見る所、言語者の精深なるに及ばずと雖ども、其の才は則ち能く事為に達する者なり、故に又た之に次ぐ。文学は、則ち才或いは為す有る能はず、但だ文義中に於いて講求するも亦

た得る所有り、故に又た之に次ぐ。○四科の列する所の十人は、皆な陳蔡に従ふ者にして、此の十人を以て独哲と為すに非ざるなり。唐の開元、孔子を礼祀するに、此の十人を以て十哲と爲す。其の後に顔子升侑し、而して曾子を以て之を補ふ。曾子升侑し、而して子張を以て之を補ふ。則ち所謂る十哲なる者は、皆な臆見なり。景定の礼、顔、曾、思、孟を以て四侑と爲す、議する者猶ほ顔路、曾皙、伯魚の並びに其の下に列するを以て未だ安ならずと爲す。金仁山は乃ち古の堂事の制に拠らんと欲す、庠序の礼のごときは、献酬を先にして燕を後にす、牲、幣、旅、陳を以て先聖に享し、而して堂に南面す、繼いで顔、曾、思、孟を以て侑と爲す、燕礼、籩豆、簠簋を用ひて先聖に奠して室に東向す、顔路、曾皙、七十子を以て左右に袷食すること、昭穆の列のごとし。窃かに謂へらく此れも亦た未だ袷食の礼を知らず賢を扱びて室に侑すむべき者に非ざるなり。袷食は昭穆のごとし、亦た兩廡に列すると何ぞ異ならんや。若し此れに因りて其の意を得れば、則ち亦た処無きを患へず。

「語釈」

○孟子謂七十子之服孔子 『孟子』公孫丑上に、「徳を以て人を服する者は、中心悦びて誠に服するなり。七十子の孔子に服するがごときなり」とある。

○金仁山乃欲據古堂事之制、如昭穆之列 金履祥「文廟祭議」(『仁山文集』卷三)に、「景定の礼は、顔曾思孟を以て四侑と爲す。万世の公論、斯に於いて允に然りと爲す。前次に議する者、猶ほ顔路、曾皙、伯魚並びに下列に在るを以て未だ安ならずと爲す、則ち之を如何せん。則ち亦た

古の制に復するのみ。古者、寢廟の制は、前を堂と為して後を室と為す。宗廟の祭は、室事を先にして堂事を後にす。而して庠序の礼は、献酬を先にして燕礼を後にす。今、二丁の祭は、宜しく先づ享礼を用ふべし。牲帛旅陳もて先聖を享して堂に南面す、顔曾思孟を以て侑し、既に燕礼、籩豆、簠簋を用ひて先聖を奠して室に東西す、顔路曾皙而下七十子を以て左右に衽食す、昭穆の儀のごとし」とある。

【三】

○子曰、回也非助我者也。於吾言無所不説。

説、與心相契之意、即不亦説乎之説。非助於説見之。此二者、雖若有憾、而實喜其能自得也。

〔訓読〕

○子曰く、回や我を助くる者に非ざるなり。吾の言に於いて説ばざる所無しと。

説は、心と相ひ契ふの意、即ち亦た説ばしからずやの説なり。説びを助けて之を見るに非ず。此の二言は、憾み有るがごとしと雖ども、而れども実に其の能く自得するを喜ぶなり。

〔語釈〕

○不亦説乎 『論語』学而・1章に、「学びて時に之を習ふ、亦た説ばしからずや」とある。

【四】

○子曰、孝哉閔子騫。人不問於其父母昆弟之言。

閔子騫處父母兄弟之變者也、故得其歡心爲尤難。父母兄弟皆化之、而稱其爲孝、人亦信之無有間言、則又有以孚於人矣。此非實德、何以能然。孔子以其人不易及、故特稱之。本文止言孝、而集注曰孝友者、爲昆弟二字而發。然孝者必友、如書云孝乎、而曰孝友于兄弟也、大意則包於孝字矣。○閔子騫不宜稱字、則吳氏已嘗論之、以爲夫子於弟子未嘗稱字。此或集語者之誤。

〔訓読〕

○子曰く、孝なるかな閔子騫。人、其の父母昆弟の言を問せずと。

閔子騫は父母兄弟の変に処する者なり、故に其の歡心を得ることを尤も難しと爲す。父母兄弟皆な之に化し、而して其の孝たるを称す、人も亦た之を信じて間言有る無し、則ち又た以て人を孚にすること有り。此れ実徳に非ずんば、何を以て能く然らんや。孔子、其の人の及び易からざるを以て、故に特に之を称す。本文は止だ孝と言ひ、而して集注に孝友と曰ふ者は、昆弟の二字の爲なにして発すればなり。然らば孝なる者は必ず友あり、書に孝たりと云ひて、孝なるかな、兄弟に友にと曰ふがごとく、大意は則ち孝の字を包ぬ。○閔子騫は宜しく字を称すべからず、則ち吳氏已に嘗て之を論じ、以爲へらく夫子の弟子に於ける未だ嘗て字あざなを称せず。此れ或いは語を集むる者の誤りならん。

〔語釈〕

○書云孝平、而曰孝友于兄弟也 『論語』為政・21章に、「子曰く、書に云ふ、孝なるかな惟れ孝、兄弟に友に、有政に施すと」とある。

○閔子騫不宜稱字、則吳氏已嘗論之 『論語集注大全』卷一一・4章に、「吳氏曰く、夫子の弟子に於ける、未だ嘗て字を称せず。此れ或いは語を集むる者の誤ならん」とある。

【五】

○南容三復白圭、孔子以其兄之子妻之。

孔子於南容嘗以君子稱之。觀其謹言在未娶之前、則容之成德、蓋亦早矣。但其德或不及冉牛、故孟子不列於德行耳。

〔訓読〕

○南容、三たび白圭を復す、孔子、其の兄の子を以て之に妻す。

孔子、南容に於いて嘗て君子を以て之を称す。其の謹言、未だ娶らざるの前に在るを觀れば、則ち容の成徳は、蓋し亦た早なり。但だ其の徳、或いは冉牛に及ばず、故に孟子、德行に列せざるのみ。

〔語釈〕

○孟子不列於德行 『孟子』公孫丑上・2章に、「宰我、子貢は善く説辞を為し、冉牛、閔子、顔淵は善く徳行を言ふ」とある。この語は公孫丑が質問した言葉であるが、孔子の弟子のなかから

德行として冉牛・閔騫・顔淵を挙げるのみで南容を挙げていないことを言う。

【六】

○季康子問、弟子孰為好學。孔子對曰、有顏回者好學。不幸短命死矣。今也則亡。

顏子好學、緊要處全在不遷怒、不貳過。詳見雍也篇哀公問弟子章、然不以告康子也。

〔訓読〕

○季康子問ふ、弟子、孰か學を好むと為すと。孔子對へて曰く、顏回なる者有り、學を好む。不幸短命にて死せり。今や則ち亡しと。

顏子の好學、緊要なる處は全て怒りを遷さず、過ちを貳ふたたびせざるに在り。詳しくは雍也篇の哀公問弟子章に見ゆ、然らば以て康子に告げざるなり。

〔語釈〕

○詳見雍也篇哀公問弟子章 『論語』雍也篇・2章に「哀公問ふ、弟子孰か學を好むと為す。孔子對へて曰く、顏回なる者有り、學を好む。怒りを遷さず、過ちを貳ふたたびせず。不幸短命にして死せり。今や則ち亡し。未だ學を好む者を聞かざるなり」とある。詳しくは、本訳注(六)参照。

【七】

○顔淵死。顔路請子之車以爲之椁。子曰、才不才、亦各言其子也。鯉也死、有棺而無椁。吾不徒行以爲之椁。以吾從大夫之後、不可徒行也。

邢氏曰、鯉也死時、孔子蓋年七十左右、非在大夫位。杜預曰、常爲大夫而去、故言後也。

〔訓読〕

○顔淵死す。顔路、子の車を請ひ、以て之が椁を爲らんとす。子曰く、才も不才も、亦た各其の子と言ふなり。鯉や死するに、棺有れども椁無し。吾、徒行して以て之が椁を爲らず。吾の大夫の後に従ふを以て、徒行すべからざればなりと。

邢氏曰く、鯉や死する時、孔子蓋し年七十左右、大夫の位に在るに非ずと。杜預曰く、常て大夫と爲りて去る、故に後と言ふなりと。

〔語釈〕

○邢氏曰く非在大夫位 『論語注疏』卷一一（邢昺疏）に同文が見える。

○杜預曰く故言後也 『論語注疏』卷一一に、「嘗て大夫と爲りて去る、故に後と言ふなり」とある。

【八】

○顔淵死。子曰、噫、天喪予、天喪予。

新安陳氏曰、夫子之道頼顔子以傳者也。顔子在則道有傳、孔子他日雖死而不死。顔子死則道無傳、孔子今日雖未亡而已亡、故不謂天喪回、而曰天喪予、良可悲矣。雲峰胡氏曰、夫子上接文王之傳、則曰天將喪斯文。下失顔淵之傳、則曰天喪予。然則道統之絶續、皆天也。二説皆足以發天喪之意。

〔訓読〕

○顔淵死す。子曰く、噫、天、予を喪ぼせり、天、予を喪せりと。

新安陳氏曰く、夫子の道は顔子に頼りて以て伝ふる者なり。顔子があれば則ち道に伝有り。孔子、他日死すと雖ども而れども死せざるなり。顔子死すれば則ち道に伝無し、孔子、今日、未だ亡びずと雖ども而れども已に亡べり、故に天、回を喪ぼせりと謂はずして、天、予を喪せりと曰ふ、良に悲しむべしと。雲峰胡氏曰く、夫子、上は文王の伝に接す、則ち曰く天、將に斯文を喪ぼさんとすと。下は顔淵の伝を失ふ、則ち曰く天、予を喪ぼせりと。然らば則ち道統の絶続は、皆な天なりと。二説皆以て天喪の意を發するに足る。

〔語釈〕

○新安陳氏曰く良可悲矣 『論語集注大全』卷一一・八章。

○雲峰胡氏く皆天也 『論語集注大全』卷一一・八章。

〔校異〕

○發明天喪 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「明」字を欠く。

【九】

○顔淵死。子哭之慟。從者曰、子慟矣。曰、有慟乎。非夫人之爲慟而誰爲。

慟顔子而不知其過、當慟而慟者也。此與聞韶不知肉味義同、皆不可謂非性情之正。

〔訓読〕

○顔淵死す。子、之を哭して慟す。從者曰く、子慟せりと。曰く、慟すること有るか。夫の人の爲に慟するに非ずして誰が爲にかせんと。

顔子を慟して其の過ちを知らざるは、当に慟すべくして慟する者なり。此れ韶を聞きて肉の味を知らずの義と同じ、皆な性情の正に非ずと謂ふべからず。

〔語釈〕

○聞韶不知肉味 『論語』述而・13章に、「子、斉に在りて韶を聞く。三月、肉の味を知らず。曰く、はか凶らざりき、がく樂を為すことの斯三に至らんとは」とある。

【十】

○顔淵死。門人欲厚葬之。子曰、不可。門人厚葬之。子曰、回也視予猶父也。予不得視猶子也。非我也、夫二三子也。

門人、謂顔子之門人。門人欲厚葬之、雖以顔子爲賢、而出於至愛、然無財不可爲悅、中間多所強爲、非心所安也。故孔子以爲不可。蓋能明於死生之說、葬雖速朽、可也。而何必過於厚哉。

〔訓読〕

○顔淵死す。門人厚く之を葬らんと欲す。子曰く、不可と。門人厚く之を葬る。子曰く、回や予を視ること猶ほ父のごとくなり。予、視ること猶ほ子のごとくするを得ず。我に非ざるなり、夫の二三子なりと。

門人は、顔子の門人を謂ふ。門人、厚く之を葬らんと欲す、顔子を以て賢と爲し、而して至愛より出づと雖ども、然れども財無くして悦びを爲すべからず、中間に強ひて爲す所多く、心の安んずる所に非ざるなり。故に孔子以て不可と爲す。蓋し能く死生の説を明らかにすれば、葬は速朽と雖ども、可なり。而るを何ぞ必ずしも厚に過あやまたんや。

【十一】

○季路問事鬼神。子曰、未能事人、焉能事鬼。敢問死。曰、未知生、焉知死。

既未能事人、而先欲事鬼。未能知生、而先欲知死。即此已是遠求、而集註以爲皆切問、恐非聖人之意也。

〔訓読〕

○季路、鬼神に事へんことを問ふ。子曰く、未だ人に事ふること能はず、焉んぞ能く鬼に事へんと。敢へて死を問ふ。曰く、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんと。

既に未だ人に事ふる能はず、而して先づ鬼に事へんと欲す。未だ生を知る能はず、而して先づ死を知らんと欲す。即ち此れ已に是れ遠く求む、而して集註以て皆な切問なりと為すは、恐らく聖人の意に非ざるなり。

〔語釈〕

○集註以爲皆切問 『論語集注』卷一一・11章に、「鬼神に事ふるを問ふは、蓋し祭祀に奉ずる所以の意を求むるなり。而して死は人の必ず有る所にして、知らずんばあるべからず。皆切問なり」とある。

【十二】

○関子侍側、闔閭如也。子路、行行如也。冉有、子貢、侃侃如也。子樂。若由也、不得其死然。

樂字、如集註解、無不可通。但以文義求之、則以樂字作曰字者、於理不牽強也。由也不得其死、新安陳氏以爲只如平常說死非正命之謂、未說到不得死所處者、得之。

〔訓読〕

○関子、側に侍る。闔閭如たり。子路、行行如たり。冉有、子貢、侃侃如たり。子樂しむ。由がごときや、其の死を得ざらんと。

樂の字は、集註のごとく解すれば、通ずべからざるは無し。但だ文義を以て之を求むれば、則ち樂の

字を以て曰の字と作す者、理に於いて牽強せざるなり。由や其の死を得ずとは、新安陳氏以為へらく、只だ平常のごとく説けば、死は正命に非ざるの謂ひなるも、未だ死の処する所を得ざる者に説き到らずと、之を得たり。

〔語釈〕

○新安陳氏以爲く未説到不得死所處者 『論語集注大全』卷一一・12章。

【十三】

○魯人爲長府。閔子騫曰、仍舊貫、如之何。何必改作。子曰、夫人不言、言必有中。如之何者、有何不善之辭。不言二字、止發言字。言必有中、然後見其不妄發也。

〔訓読〕

○魯人長府を爲る。閔子騫曰く、旧貫に仍らば、之を如何。何ぞ必ずしも改作せんと。子曰く、夫の人は言はず、言へば必ず中たること有り。

之を如何とは、何の不善か有るの辭。言はずの二字は、止だ言の字を發す。言へば必ず中たる有り、然る後に其の妄りに發せざるを見るなり。

【十四】

○子曰、由之瑟奚爲於丘之門。門人不敬子路。子曰、由也升堂矣、未入於室也。

子路能識其大、忠信之已立、是升堂也。第於無聲無臭之地未到、是爲不入室耳。孔子謂其瑟不與己同、以不足於中和、即不入室之意。

〔訓読〕

○子曰く、由の瑟は奚爲れぞ丘の門に於いてせんと。門人は子路を敬せず。子曰く、由は堂に升れり、未だ室に入らざるなりと。

子路、能く其の大を識る、忠信の已に立つるは、是れ堂に升るなり。第ただ無聲無臭の地に於いて未だ到らず、是れ室に入らずと爲すのみ。孔子、其の瑟、己と同じからず、以て中和に足らずと謂ふは、即ち室に入らざるの意なり。

〔語釈〕

○孔子謂其瑟不與己同、以不足於中和 『論語集注』卷一一・14章に、「程子曰く、其の声の不和、己と同じからざるを言ふなり。家語に云ふ、子路の鼓瑟、北鄙殺伐の声有り。蓋し其の氣質剛勇にして中和に足らずと」とある。

【十五】

○子貢問、師與商也孰賢。子曰、師也過、商也不及。曰、然則師愈與。子曰、過猶不及。

過與不及、皆氣質用事。當時以過者爲高、故子貢疑師爲愈。然中庸論爲道者、常以過高遠人爲戒。故孔子以爲過猶不及、則以其氣質之偏、折之於義理之中矣。

〔訓読〕

○子貢問ふ、師と商と孰か賢れると。子曰く、師は過ぎたり、商は及ばずと。曰く、然らば則ち師は愈れるかと。子曰く、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとしと。

過ぎたると及ばざるとは、皆な氣質の用事なり。當時、過ぎたる者を以て高しと爲す、故に子貢は師を愈れりと爲すかと疑ふ。然れども中庸に論じて道と爲す者は、常に過ぎたると高遠たるとの人を以て戒めと爲す。故に孔子は以て過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとしと爲す、則ち其の氣質の偏を以て、之を義理の中に折するなり。

【十六】

○季氏富於周公。而求也爲之聚斂而附益之。子曰、非吾徒也。小子鳴鼓而攻之可也。

此可見孔子之教、以愛民爲本、而政之所先、莫切於輕徭薄賦也。

〔訓読〕

○季氏、周公よりも富めり。而るに求や、之が為に聚斂して之を附益す。子曰く、吾が徒に非ざるなり。小子、鼓を鳴らして之を攻めて可なりと。

此れ孔子の教へ、民を愛するを以て本と為し、而して政の先んずる所は、徭を軽くし賦を薄くするより切なるは莫きを見るべし。

【十七】

○柴也愚、參也魯、師也辟、由也喭。

楊氏謂四者性之偏、語之使知自勵、則聖人之意矣。曾子實用其力、故能傳道。三子工夫不及曾子精切、故只成就得性之所近耳。

〔訓読〕

○柴や愚、參や魯、師や辟、由や喭と。

楊氏の四者は性の偏、之を語^りげて自ら励むことを知らしむと謂ふは、則ち聖人の意なり。曾子、実に其の力を用ふ、故に能く道を伝ふ。三子の工夫、曾子の精切なるに及ばず、故に只だ性の近き所を成就し得るのみ。

〔語釈〕

○楊氏謂四者性之偏、語之使知自勵 『論語集注』先進・十一章。楊氏は、楊時。

【十八】

○子曰、回也其庶乎、屢空。賜不受命、而貨殖焉。億則屢中。

庶乎、言其近道也。屢空、謂數至空乏、蓋何晏舊註。陶淵明簞瓢屢空之說亦本於此。或以虛中爲空、然謂之屢、則空常有間、非所以語顏子也、朱子或問蓋嘗口之矣。子貢之貨殖、非忘義而徇利者也。只是言其欲治生不能忘其貧耳、故謂之不受命。謀道不謀食、方是能受命處。億、記憶也。言其思慮記得時、屢屢能中道。蓋即日月至焉之意、亦非但謂其料事多中而已。夫人求道之心重、則求富之心輕、求富之心重、則求道之心輕、此顏回、子貢之所以不同也。然子貢特不及顏回耳、其於義利、是非之辯、則同聞聖門之教、而所務皆實學、豈欲假借富厚之力、以徼人之起敬者哉。司馬遷謂子貢既學於仲尼、退而仕於衛、鬻財於曹魯之間、七十子之徒、賜最爲饒益。原憲不厭糟糠、匿於窮巷。子貢結駟連騎、束帛走幣、以聘享諸侯、所至國君無不分庭與之抗禮。夫使孔子名布揚於天下者、子貢後先之也、此所謂得勢而益彰者乎。此非知子貢者也。自此言一出、而世之學者遂以孔門之徒實有此事。將皆欣然求富、而忘其所守、於不能安貧之中、而又加之以驕侈希世取榮、其害教豈不大哉。

〔訓読〕

○子曰く、回や其れ庶からんか、屢^{しば}しば空し。賜は命を受けずして、貨殖す。億^{はか}れば則ち屢しば中たると。庶からんかは、其の道に近きを言ふなり。屢しば空しは、數しば空乏に至るを謂ふ、蓋し何晏の旧註なり。陶淵明の簞瓢屢しば空しの説も亦た此に本づく。或いは虚中を以て空と爲す、然して之を屢しばと謂ふは、則ち空は常に間有り、顔子に語る所以に非ざるなり、朱子の或問、蓋し嘗て之を〔弁〕ぜり。

子貢の貨殖は、義を忘れて利に徇ふ者に非ざるなり。只だ是れ其の生を治めんと欲して其の貧を忘るる能はざるを言ふのみ、故に之を命を受けずと謂ふ。道を謀りて食を謀らざるは、方に是れ能く命を受くる処なり。億は、記憶なり。其の思慮記し得たる時、屢屢能く道に中たるを言ふ。蓋し即ち日月至れりの意なり、亦た但だ其の事を料りて中たること多しと謂ふのみに非ず。夫れ人の道を求むるの心重ければ、則ち富を求むるの心軽し、富を求むるの心重ければ、則ち道を求むるの心軽し、此れ顔回、子貢の同じからざる所以なり。然らば子貢、特だ顔回に及ばざるのみにして、其の義利、是非の弁に於いては、則ち同に聖門の教へを聞き、而して務むる所も皆な実学なり、豈に富厚の力に仮借して、以て人の敬を起こすを徼めんと欲する者ならんや。司馬遷謂ふ、子貢は既に仲尼に学び、退きて衛に仕へ、財を曹、魯の間に鬻ぐ、七十子の徒、賜や最も饒益たり。原憲は糟糠を厭はず、窮巷に匿る。子貢は駟を結び騎を連ね、束帛走幣して、以て諸侯に聘享し、至る所の国君、分庭して之と礼を抗せざるは無し。夫れ孔子の名をして天下に布揚せしむる者、子貢、之に後先するなり、此れ所謂る勢を得て益ます彰はす者ならんやと。此れ子貢を知る者に非ざるなり。此の言一たび出でてより、世の学者遂に以へらく、孔門の徒に実に此の事有りと。將に皆な欣然として富を求め、而して其の守る所を忘れんとす、貧に安んずる能はざるの中に於いて、而して又た之に加ふるに驕侈、希世、取栄を以てすれば、其の教へを害するのと、豈に大ならずや。

「語釈」

○陶淵明簞瓢屨空之說 陶潛「五柳先生伝」に、「環堵蕭然として、風日を蓋はず、短褐穿結し、簞瓢屨しば空しきも、晏如たり」とある。

○朱子或問蓋嘗辯之矣 『四書或問』卷一六・論語先進第十一参照。

○司馬遷謂く此所謂得勢而益彰者乎 『史記』卷一二九・貨殖列伝参照。

〔校異〕

○嘗□之矣 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「嘗辯之矣」とした。

【十九】

○子張問善人之道。子曰、不踐跡、亦不入於室。

問善人而以其道、是以日用事物當然之理言也。善人固爲此道者也。但非善人、則其爲道不免於循途守轍、所謂踐跡也。善人則德性用事、不踐舊跡、而由天理以行。然必須學乃得進於君子聖人、以入精微之奧。此謂無聲無臭之地、蓋相在爾室、尚不愧於屋漏之功也。孔子謂十室之邑、必有忠信如丘者焉、不如丘之好學也、亦是此意。忠信、善人之質也。好學、則入室矣。此欲人好學以成其善耳。

〔訓読〕

○子張、善人の道を問ふ。子曰く、跡を踐まず、亦た室に入らずと。

善人を問ひて其の道を以てす、是れ日用の事物、當然の理を以て言ふなり。善人は固より此の道を為

す者なり。但だ善人に非ざれば、則ち其の道を為すこと、途に循ひ轍を守るを免れず、所謂る跡を踐むなり。善人は則ち徳性用事、旧跡を踐まず、而して天理に由りて以て行ふ。然らば必ず須らく学べば乃ち君子、聖人に進みて、以て精微の奥に入るを得るべし。此れ無声無臭の地、蓋し相ひ爾の室に在り、尚ほ屋漏の功に愧ぢずと謂ふなり。孔子の十室の邑、必ず忠信有ること丘のごとき者あり、丘の学を好むに如かざるなりと謂ふも、亦た是れ此の意なり。忠信は、善人の質なり。好學は、則ち室に入るなり。此れ人の学を好みて以て其の善を成さんことを欲するのみ。

【二十】

○子曰、論篤是與、君子者乎。色莊者乎。

論篤、以言足恭者也。觀聖人之友君子、輯柔爾顔、不遐有愆、猶以其聲色在外、而必求之於相在邇室、尚不愧於屋漏之地、則言論之篤實、安可遂以信人乎。

〔訓読〕

○子曰く、論篤きにはれ与せども、君子なる者か。色莊なる者かと。

論篤きは、言を以て恭ふに足る者なり。聖人の君子を友にするを觀るに、爾の顔を輯柔にして、遐ぞ愆ち有らざらん、猶ほ其の声色の外に在るを以てす、而して必ず之を邇の室に在るを相るに、尚ほ屋漏に愧ぢざるの地に求む、則ち言論の篤實なること、安んぞ遂に以て人を信ずべけんや。

〔語釈〕

○觀聖人之友君子、不遐有愆。『詩經』大雅・抑に「爾の君子を友にするを視るに、爾の顔を輯柔にして、遐なんぞ愆あやまち有らざらん。爾の室に在るを相みる、尚ほ屋漏に愧ぢず」とある。

○相在邇室、尚不愧於屋漏 前注參照。

【二十一】

○子路問、聞斯行諸。子曰、有父兄在、如之何其聞斯行之。冉有問、聞斯行諸。子曰、聞斯行之。公西華曰、由也問聞斯行諸、子曰、有父兄在、求也問聞斯行諸、子曰、聞斯行之。赤也惑、敢問。子曰、求也退、故進之。由也兼人、故退之。

聞、謂聞道於夫子也。有父兄在之云、非以其不稟命也。如子路之好義、豈不知稟命父兄者哉。但謂其父見在、則當謹於行事、不貽之憂辱云耳。

〔訓読〕

○子路問ふ、聞けば斯これち諸を行はんかと。子曰く、父兄の在る有り、之を如何ぞ其れ聞けば斯これち之を行はんと。冉有問ふ、聞けば斯これち諸を行はんかと。子曰く、聞けば斯これち之を行へと。公西華曰く、由や問ふ、聞けば斯これち諸を行はんかと。子曰く、父兄の在る有りと。求や問ふ、聞けば斯これち諸を行はんかと。子曰く、聞けば斯これち之を行へと。赤や惑ふ。敢へて問ふと。子曰く、求や退く、故に之を進む。由や人を兼ね、故

に之を退くと。

聞は、道を夫子に聞くを謂ふなり。父兄の在る有りの云ひは、其の命を稟けざるを以てするに非ざるなり。子路の義を好むがときは、豈に命を父兄に稟くるを知らざる者ならんや。但だ其の父見在なるを謂ふは、則ち当に事を行ふに謹み、之に憂辱を貽おとさざるべしと云ふのみ。

【二十二】

○子畏於匡、顔淵後。子曰、吾以女爲死矣。曰、子在、回何敢死。

何敢死、邢氏以爲夫子在、己不敢致死是也。謝□敢非不敢之敢、乃果敢之敢、即集註不赴□而必□之意。恐辭氣亦太急矣。○程子搏虎之喻、發明處死之道、可謂盡矣。

〔訓読〕

○子、匡に畏る。顔淵後る。子曰く、吾、女なんぢを以て死せりと為すと。曰く、子在す。回、何ぞ敢へて死せんと。

何ぞ敢へて死せんは、邢氏以爲へらく、夫子在れば、己、敢へて死を致さず、是れなり。謝〔氏〕の敢は、敢へてせずの敢に非ず、乃ち果敢の敢なりと〔謂ふ〕は、即ち集註の〔門に〕赴きて必ずしも〔死せ〕ざるの意なり。恐らくは辞氣も亦た太はなはだ急なり。○程子、虎を搏つはの喻へ、死に処するの道を發明す、尽くせりと謂ふべし。

〔語釈〕

○邢氏以爲夫子在、己不敢致死 『論語注疏』（邢昺疏）に、「子在す、回何ぞ敢へて死せんとは、言ふところは、夫子、若し危難に陥れば則ち回必ず死を致さん、今、夫子在れば、己は則ち敢へて死す所無し」とある。

○謝□□敢非不敢之敢、乃果敢之敢 『論語集注大全』先進・22章に同文が見える。

○集註不赴門而必死之意 『論語集注』先進・22章。

〔校異〕

○謝□□ 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「謝氏謂」とした。

○不赴□而必□ 『論語集注』に従い「不赴門而必死」とした。

【二十三】

○季子然問、仲由、冉求可謂大臣與。子曰、吾以子爲異之間。曾由與求之間。所謂大臣者、以道事君、不可則止。今由與求也、可謂具臣矣。曰、然則從之者與。子曰、弑父與君、亦不從也。

異之間、亦就大臣言、謂或有異人也。觀弑父與君亦不從之言、可見孔門學者、其志節與人不同矣。

〔訓読〕

○季子然問ふ、仲由、冉求は大臣と謂ふべきかと。子曰く、吾、子を以て異なれるを之れ問ふと爲す。曾

ち由と求とを之れ問ふか。所謂る大臣とは、道を以て君に事ふ、不可なれば則ち止む。今、由と求とは、具臣と謂ふべしと。曰く、然らば則ち之に従ふ者かと。子曰く、父と君とを弑さんには、亦た従はざるなりと。

異なるを之れ問ふは、亦た大臣に就きて言ふ、或いは異人有るを謂ふなり。父と君とを弑さんには亦た従はずの言を觀れば、孔門の學者、其の志節、人と同じからざるを見るべし。

【二十四】

○子路使子羔爲費宰。子曰、賊夫人之子。子路曰、有民人焉、有社稷焉。何必讀書、然後爲學。子曰、是故惡夫佞者。

子羔、本忠信之資、而偏於愚者。孔子以其學術未明、恐不足以處惡人、是害之也。子路則謂仕亦可學、學不必在讀書、如天子諸侯稚年嗣位者、亦每有之、豈皆學而後仕哉。此言未爲非是、但不知孔子所以不欲使子羔之意。乃爲陪臣受制於人、非成德達材者、未可即試。而子路專執己見、遂以口辯禦之。此孔子所以不斥其非、而但惡其佞也。

【訓読】

○子路、子羔をして費の宰と為らしむ。子曰く、夫の人の子を賊ふと。子路曰く、民人有り、社稷有り。何ぞ必ずしも書を読み、然る後に学を為さんと。子曰く、是の故に夫の佞者を惡むと。

子羔は、忠信の資を本として、愚に偏する者なり。孔子は其の學術未だ明らかならざるを以て、以て悪人に処するに足らざるを恐る、是れ之を害するなり。子路は則ち仕も亦た学ぶべし、学は必ずしも読書に在らず、天子諸侯の稚年に位を嗣ぐ者のごときも、亦た毎に之れ有り、豈に皆学びて而る後に仕へんやと謂ふ。此の言、未だ是に非ずと為さず、但だ孔子の子羔を使はんと欲せざる所以の意を知らず。乃ち陪臣の為に制を人に受くれば、成徳達材の者に非ざれば、未だ即ち試すべからず。而れども子路は専ら己の見を執り、遂に口弁を以て之を禦ぐ。此れ孔子の其の非を斥けずして、但だ其の佞を惡む所以なり。

【二十五】

子路、曾皙、冉有、公西華侍坐。子曰、以吾一日長乎爾、毋吾以也。居則曰、不吾知也。如或知爾、則何以哉。子路率爾而對曰、千乘之國、攝乎大國之間、加之以師旅、因之以饑饉。由也爲之、比及三年、可使有勇、且知方也。夫子哂之。求、爾何如。對曰、方六七十、如五六十、求也爲之、比及三年、可使足民。如其禮樂、以俟君子。赤、爾何如。對曰、非曰能之、願學焉。宗廟之事、如會同端章甫、願爲小相焉。點、爾何如。鼓瑟希。鏗爾、舍瑟而作。對曰、異乎三子者之撰。子曰、何傷乎。亦各言其志也。曰、莫春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。夫子喟然歎曰、吾與點也。

如或知爾、言人或知而舉之也。觀由求赤三子所言、皆爲人所舉而爲大夫當國之事也。子路率爾之對、亦

見其勇於有爲。千乘、公侯大國、而猶曰攝乎大國之間。以春秋時、大國又有吞併附庸而加多者也。哂、微笑也、難於言而不欲示之以怒色之意。方六七十、如五六十、謂封國之制。伯七十里、或密爾大國、而爲其所侵、則有損十里而爲六十者矣。子男五十里、然或兼併小國、而據其所有、則有益十里而爲六十者矣。禮樂、以化民成俗言也。公西華志於禮樂、因冉有不敢居、而以願學爲說。宗廟、諸侯之宗廟。□□、□侯會盟之事。同、同盟也、厚齋馮氏嘗言之矣。慶□□氏曰、端、玄端服、古者君臣皆得服之。章甫、緇布冠、三代常服、行道之冠也。相、贊君行禮者。言小、謙若不敢自大之辭、非謂別有一大相、而僅居其小也。公西華所言、雖若禮樂之末節、然既以禮樂爲志、必知以學道愛人爲本者矣。莫春、巴川楊氏以爲建辰之月是也。蓋周改正朔、雖子爲春始、而民俗猶用夏時也。浴、周文安公以爲沿字之誤、於理可通。三子之志、皆在於用世。子路爲之、必勇作其氣、義作其忠以治內、而足以威鄰國也。冉有爲之、必勸之農桑、教之節儉以務本、而足以厚民生也。公西華爲之、必肅其儀容、修其辭令以詔君、而足以感格神人也。雖皆實學、跡尚涉粗耳。惟曾皙則但知與弟子講學自修、對時育物、無外慕心、故孔子與之。其言語脫灑、固見狂者胸次超然、當其時、工夫亦自定靜、故氣象從容、此豈三子規規於事爲之末者可及哉。○觀冉有之志在於足民、本非欲聚斂者。及爲季氏宰、而爲之附益、則與其志大不侔矣。豈以小臣未得專行、而不能不徇季氏之欲邪。然亦可見其志之不立也。

三子者出。曾皙後。曾皙曰、夫三子者之言何如。子曰、亦各言其志也已矣。曰、夫子何哂由也。曰、爲國以禮、其言不讓、是故哂之。唯求則非邦也與。安見方六七十如五六十而非邦也者。唯赤則非邦也與。宗廟

會同、非諸侯而何。赤也爲之小、孰能爲之大。

子路爲國、勇於爲義者也。但欲使民知方、却是欲化民成俗也、必須有謙讓實德、乃能曲盡人情、而有感動。今率爾之對、直任以爲己能、是不讓也。不讓在言上見、而以率爾發之耳。唯求、唯赤非邦二語、非曾皙問也。蓋孔子因二子言志、不露國字、而明其皆國、以見其自謙。所以發子路見哂之意也。赤也爲之小、爲之謂爲諸侯相。孔子以自謙居小、而他人爲之、必無大於赤者、故曰孰能爲之大也。○三子之志皆屬事功、能於禮樂而致中和焉、則亦天理流行、非粗迹矣。曾皙之言、使無三子之實地、則亦虛見而已。故三子能致其虛、而曾皙能就其實、乃皆合於中行耳。

〔訓読〕

子路、曾皙、冉有、公西華、侍坐す。子曰く、吾の一日爾なんぢより長ずるを以て、吾を以てすること毋かれ。居れば則ち曰く、吾を知らざるなりと。如し爾を知ること或れば、則ち何を以てせんやと。子路、率爾として對へて曰く、千乗の國、大國の間に撰し、之に加ふるに師旅を以てし、之に因るに饑饉を以てす。由や之を爲なむれば、三年に及ぶ比こゝろ、勇有りて且つ方を知らしむべきなりと。夫子、之を哂う。求、爾は何如と。對へて曰く、方六七十、如しくは五六十、求や之を爲むれば、三年に及ぶ比、民を足らしむべし。其の礼樂のごときは、以て君子を俟たんと。赤、爾は何如と。對へて曰く、之を能くすと曰ふには非ず、願はくは学ばん。宗廟の事、如しくは会同に端章甫して、願はくは小相たらんと。点、爾は何如と。瑟を鼓くこと希なり。鏗爾として瑟を舍きて作つ。對へて曰く、三子者の撰に異なれりと。子曰く、何ぞ傷まん。

亦た各其の志を言ふなりと。曰く、莫春には、春服既に成る。冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風じて、詠じて帰らんと。夫子喟然として歎じて曰く、吾は点に与せんと。

如し爾を知ること或ればとは、人の知りて之を挙ぐることに或るを言ふなり。由、求、赤の三子の言ふ所を観るに、皆な人の挙ぐる所と為りて大夫の国に当たるの事を為すなり。子路、率爾たるの対へも、亦た其の有為に勇なるを見ず。千乗は、公侯の大国、而して猶ほ大国の間を摂むと曰ふがごとし。春秋の時を以て、大国又た吞併附庸して多を加ふる者有るなり。晒は、微笑なり、言を難ずるも之に示すに怒色を以てせんと欲せざるの意なり。方六、七十、如しくは五、六十は、封国の制を謂ふ。伯は七十里、或いは密爾たる大国にして、其の侵す所と為れば、則ち十里を損じて六十と為る者有り。子、男は五十里、然らば或いは小国を兼併して、其の有する所に拠れば、則ち十里を益して六十と為る者有り。礼楽は、民を化し俗を成すを以て言ふなり。公西華は礼学に志あり、冉有の敢へて居らざるに因りて、願はくは学ばんを以て説を為す。宗廟は、諸侯の宗廟。「会同は、諸」侯会盟の事。同は、同盟なり、厚齋馮氏嘗て之を言へり。慶〔源輔〕氏曰く、端は、玄端服なり、古者、君臣皆な之を服するを得たり。章甫、緇布冠は、三代の常服、行道の冠なりと。相は、君を賛けて礼を行ふ者なり。小と言ふは、謙にして敢へて自ら大とせざるがごときの辞なり、別に一大相有りて、僅かに其の小に居ると謂ふに非ざるなり。公西華の言ふ所、礼楽の末節のごとしと雖ども、然れども既に礼楽を以て志と為す、必ず道を学び人を愛するを以て本と為す者なるを知れり。莫春は、巴川楊氏以て建辰

の月と為す、是れなり。蓋し周、正朔を改む、子を春の始めと為すと雖ども、而れども民俗は猶ほ夏時を用ふるなり。浴は、周の文安公以て沿の字の誤りと為す、理に於いて通ずべし。三子の志、皆な世に用ひらるるに在り。子路は之が為に、必ず勇として其の氣を作し、義として其の忠を作して以て内を治め、而して以て隣國を威するに足るなり。冉有は之が為に、必ず之に農桑を勧め、之に節儉を教へて以て本を務め、而して以て民生を厚くするに足るなり。公西華は之が為に、必ず其の儀容を肅み、其の辞令を修めて以て君に詔げ、而して以て神人を感格せしむるに足るなり。皆な実学と雖ども、跡は尚ほ粗に渉るのみ。惟れ曾皙は則ち但だ弟子と講学自修するを知るのみにして、時に對して物を育み、慕心に外無し、故に孔子、之に与す。其の言語脱灑、固に狂者の胸次超然たるを見る、其の時に当たりて、工夫も亦た自ら定靜、故に氣象從容たり、此れ豈に三子の事為の末に規規たる者の及ぶべきものならんや。○冉有の志、民を足らずに在るを觀るに、本より聚斂を欲する者に非ず。季氏の宰と為るに及びて、之が為に附益す、則ち其の志と大いに侔ひとしからず。豈に小臣の未だ専ら行ふを得ざるを以て、而して季氏の欲に徇はざる能はざらんや。然れども亦た其の志の立たざることを見るべきなり。

三子者出づ。曾皙後る。曾皙曰く、夫の三子者の言何如と。子曰く、亦た各其の志を言ふのみと。曰く、夫子何ぞ由を哂へるやと。曰く、國を為むるには礼を以てするも、其の言讓らず、是の故に之を哂ふと。唯だ求は則ち邦に非ざるかと。安んぞ方六七十、如しくは五六十にして、邦に非ざる者を見んと。唯だ赤

は則ち邦に非ざるかと。宗廟会同、諸侯に非ずして何ぞ。赤や之が小たれば、孰か能く之が大たらんと。子路の国を為むるは、義を為すに勇なる者なり。但だ民をして方を知らしめんと欲して、却て是れ民を化し俗を成さんと欲するなり、必ず謙讓実徳有るを須ちて、乃ち能く曲さに人情を尽くし、而して感動有らしむ。今、率爾たるの対へは、直だ任以て己が能と為す、是れ讓らざるなり。讓らざるは、言の上に在りて見る、而して率爾を以て之を発するのみ。唯だ求は、唯だ赤は邦に非ずの二語は、曾皙の問ひに非ざるなり。蓋し孔子は二子の志を言ふに、国の字を露はさざるに因りて、其れ皆な国なるを明らかにして、以て其の自謙を見す。子路の晒はるるを發する所以の意なり。赤や之が小たりは、之がたりとは、諸侯の相と為るを謂ふ。孔子、自ら謙にして小に居るを以て、而して他人、之を為せば、必ず赤より大なる者は無し、故に孰か能く之が大たらんと曰ふなり。○三子の志は皆な事功に属す、能く礼樂に於いてして中和を致せば、則ち亦た天理流行す、粗迹に非ず。曾皙の言、使し三子の実地無ければ、則ち亦た虚見なるのみ。故に三子能く其の虚を致し、而して曾皙能く其の実に就きて、乃ち皆な中行に合するのみ。

〔語釈〕

○厚齋馮氏嘗言之矣 『論語集注大全』卷一一・25章に、「厚齋馮氏曰く、会同は、諸侯の天子に朝するの礼なり。而して両君相ひ見ゆるも亦た会と曰ふ。又た同盟有り。是の時に当たりて、諸侯の天子に朝すること寡なし。華の言は、当に両君相ひ見ゆと為すべし」とある。

○慶源輔氏曰く行道之冠也 『論語集注大全』卷一一・25章に、「玄端の服は、古者、君臣皆な之を服するを得たり、章甫、緇布冠なり。夏は毋追と曰ふ、音は牟堆、商は章甫と曰ふ、周は委貌と曰ふ。其の制相ひ比す、皆な漆布を以て之を為す。蓋し三代の常服、行道の冠なり」とある。

○莫春、巴川楊氏以爲建辰之月是也 未詳。

○浴、周文安公以爲浴字之誤 未詳。

〔校異〕

○本章冒頭より「公西華志於禮樂、因冉」まで底本に落丁あり。

○□□、□侯 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「會同、諸侯」とした。

○慶□□氏曰 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「慶源輔氏曰」とした。

○固見狂者 底本は「固見往者」に作る。『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従いて改める。

○不能不徇 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は、「不能不徇」に作る。

論語私存卷十一終

論語私存卷十二

會稽季本箋釋

顏淵第十二

【一】

○顏淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己。而由人乎哉。

凡問仁者、皆言如何而可以謂之仁也。孔子則必以爲仁工夫告之。克己、舊說以爲勝私。恐本旨不然。克、能也。己、即爲仁由己之己。復、即不遠復之復。禮、則仁之曲盡處也。能自復禮、乃所以爲仁也。何待於外求哉。一日、就得仁之日而言。天下歸仁、謂皆歸所愛之中也。蓋洞然八荒、皆在我闡之意。若以人歸言效、□一日之仁、豈有天下盡歸之理。爲仁由己、正要其□於己也。顏子志意高遠。故孔子使求於己。與子貢問博施、而告以近取意同。兩爲仁、上爲字虛、下爲字實。

顏淵曰、請問其目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。顏淵曰、回雖不敏、請事斯語矣。

顏淵一聞夫子之言、即問其目。非謂天理人欲之際已判然、而不待有所疑問也。判於天理人欲、乃是非本心。人人能覺、亦無難事。但顏子求之於己、似□□下手處。□請□條目。欲工夫□□□□。勿□、心□不安而不欲爲之意。聖學只以言行爲實地。□□□、見人之行、聞人之言也。言動則言行之在己者矣。此豈假於外求哉。請事斯語、即所謂語之而不惰也。此顏子所以能至聖人處。

〔訓読〕

○顔淵仁を問ふ。子曰く、克く己礼に復るを仁と為す。一日克く己礼に復れば、天下仁に帰る。仁を為すは己に由る。人に由らんや。

凡そ仁を問ふ者は、皆如何にして以て之を仁と謂ふべきやと言ふ。孔子は則ち必ず仁を為す工夫を以て之に告ぐ。克己は、旧説以て私に勝つと為す。恐らくは本旨然らず。克は、能なり。己は、即ち仁を為すは己に由るの己なり。復は、即ち遠からずして復るの復なり。礼は、則ち仁の曲つがまに尽くす処なり。能く自ら礼に復るは、乃ち仁を為す所以なり。何ぞ外求を待たんや。一日は、仁を得るの日に就きて言ふ。天下仁に帰るは、皆愛する所の中に帰るを謂ふなり。蓋し洞然たる八荒、皆我が闡に在りの意なり。若し人帰するを以て效を言へば、「則ち」一日の仁、豈に天下尽く帰するの理あらんや。仁を為すは己に由るは、正しく其の己に「帰る」を要むるなり。顔子の志意高遠なり。故に孔子己に求めしむ。子貢博く施すを問ひて、告ぐるに近く取るを以てするの意と同じ。両つの為仁、上の為字は虚、下の為字は実なり。

顔淵曰く、請ふ其の目を問はん。子曰く、礼に非ざれば視ること勿からん、礼に非ざれば聴くこと勿からん、礼に非ざれば言ふこと勿からん、礼に非ざれば動くこと勿からん。顔淵曰く、回不敏なりと雖も、請ふ斯の語を事とせん。

顔淵一たび夫子の言を聞きて、即ち其の目を問ふ。天理人欲の際已に判然として、疑ひ問ふ所有るを待たずと謂ふに非ず。天理人欲を判つは、乃ち是非の本心なり。人人能く覚れば、亦た事とし難きこと無し。但だ顔子之を己に求むるも、「実に」手を下す処「無きが」似し。「故に其の」条目を請ふ。工夫に「精別する所有るを」欲する「のみ」。勿「とは」、心の安んぜざる「所」にして、為すを欲せざるの意なり。聖学は只だ言行を以て実地と為す。「視聴とは」、人の行を見、人の言を聞くなり。言動は則ち言行の己に在る者なり。此れ豈に外求を仮らんや。請ふ斯の語を事とせんは、即ち所謂之に語げて惰らざるなり。此れ顔子の能く聖人に至る所以の処なり。

「語釈」

○ 舊説以爲勝私 『論語集注』顔淵篇・1章に「克は勝なり。己は身の私欲を謂ふなり」とある。

○ 不遠復 『易経』復卦・初爻爻辞に「遠からずして復る。悔に祇ること無し」とある。

○ 洞然八荒、皆在我闔 呂大臨に「克己銘」があり、その語。他本に引用される形で残っている。

本章季本の議論は恐らく、『朱子語類』巻四十一・89条〜99条周辺の「克己銘」に対する朱熹の批判、すなわち「己」と対置されるべきは「私」であり、「克己銘」のように「己」と「物」を対置して、その差別を超越しようとする議論を、「克己復礼」の解釈に援用してはならない、という議論を問題にしていると思われる。

○ 子貢問博施而告以近取 『論語』雍也・28章。

○非謂天理人欲之際、疑問也 『論語集注』顏淵・2章に「顏淵は夫子の言を聞き、則ち天理人欲の際に於いて已に判然たり。故に復た疑ひ問ふ所有らずして、直ちに其の条目を請ふ」とある。

○語之而不惰 『論語』子罕・19章。

〔校異〕

○若以人歸言效□ 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「若以人歸言效則」とした。

○□於己也 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「歸於己也」とした。

○似□□下手處 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「似無實下手處」とした。

○□請□條目 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「故請其條目」とした。

○欲工夫□□□□ 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「欲工夫有所精別耳」とした。

○勿□心□不安 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「勿者心所不安」とした。

○□□□見人之行 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「視聽者見人之行」とした。

〔二〕

○仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。在邦無怨、在家無怨。仲弓曰、雍雖不敏、請事斯語矣。

聖人與門弟子言學、未有不使求之切近者。至於仲弓爲人簡靜。簡則常略。恐於外事有疎。故言出門、使民以推廣之。蓋接人之敬、莫大於大賓。承事之祭、莫大於大祭。出門使民如之、則在外之敬、無少忽矣。□略者、或不能曲盡人情。故又使之盡恕而曰、己所不欲、勿施於人。至於人之有怨、亦惟簡略而忽人者□之。邦家無怨、則敬恕之效也。凡言效者、皆使以自考之辭。在邦以爲大夫言、在家以爲家臣言。○仲弓天資簡靜、雖不及顏子之剛明、然請事斯語之言、乃□能任道處。故與顏子同成德行。此顏冉所以非諸□子□□也。

〔訓読〕

○仲弓仁を問ふ。子曰く、門を出でては大賓を見るがごとく、民を使ふには大祭を承くるがごとくせよ。己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ。邦に在りても怨無く、家に在りても怨無し。仲弓曰く、雍、不敏なりと雖も、請ふ斯の語を事とせん。

聖人、門弟子と学を言ふに、未だ之を切近に求めしめざる者有らず。仲弓に至りては、人と爲り簡靜なり。簡なれば則ち常に略なり。恐らくは外事に於いて疎有らん。故に門を出で、民を使ふを言ひて以て之を推廣す。蓋し人に接するの敬は、大賓より大なるは莫し。事を承くるの祭は、大祭より大なるは莫し。門を出で民を使ふこと之のごとくければ、則ち外に在るの敬、少しも忽せにすること無し。

〔簡〕略は、或ひは曲に人情を尽くすこと能はず。故に又た之をして恕を尽くさしめて曰く、己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ、と。人の怨有るに至りても、亦た惟だ簡略にして、人を忽せにする者之

を「招」くのみ。邦家怨無きは、則ち敬恕の效なり。凡そ效を言ふは、皆以て自ら考へしむるの辞なり。邦に在りは大夫と為るを以て言ひ、家に在りは家臣と為るを以て言ふ。○仲弓は天資簡静にして、顔子の剛明に及ばずと雖も、然れども請ふ斯の語を事とせんと言は、乃ち「其の」能く道に任ずる処なり。故に顔子と同じく徳行を成す。此れ顔冉の諸「弟」子の「及ぶ所に」非ざる所以なり。

【語釈】

○邦家無怨く考之辞 『論語集注』顔淵・2章に「内外怨無きも、亦た其の效を以て之を言ひ、以て自ら考へしむなり」とある。

○故與顔子同成徳行 『論語』先進・2章に「徳行は顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓」とある。

【校異】

○□略者 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「簡略者」とした。

○忽人者□之 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「忽人者招之」とした。

○□能任道處 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「其能任道處」とした。

○所以非諸□子□□也 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「所以非諸弟子所及也」とした。

【三】

○□□□□仁。子曰、仁□□□也。曰、其言也。曰、□□之仁矣乎。子曰、爲之難。言之得無詘乎。心存即是仁。爲之難、正以私欲難去、仁不易存也。

〔訓読〕

○〔司馬牛〕仁を「問ふ」。子曰く、仁〔者は其の言〕や詘なり。曰く、其の言や詘、「斯れ」之を仁と〔謂ふ〕か。子曰く、之を爲すこと難し。之を言ひて詘すること無きを得んや。

心存するは即ち是れ仁なり。之を爲すこと難しは、正に私欲の去り難く、仁の存し易からざるを以てなり。

〔校異〕

○□□之仁矣乎 『論語集注』他「斯謂之仁已乎」に作っており、また『四書私存』（中央研究院 中国文哲研究所）も同様である。

【四】

○司馬牛問君子。子曰、君子不憂不懼。曰、不憂不懼、斯謂之君子矣乎。子曰、内省不疚、夫何憂何懼。仁者不憂、勇者不懼、仁勇即中庸之達德也。達德得於心、然後不愧屋漏、而内省不疚。此豈人可襲取哉。

司馬牛蓋以強排遣者爲不憂不懼。故孔子告之以此。

〔訓読〕

○司馬牛君子を問ふ。子曰く、君子は憂へず懼れず。曰く、憂へず懼れず、斯ち之を君子と謂ふか。子曰く、内に省みて疚しからざれば、夫れ何をか憂へ何をか懼れんや。

仁者は憂へず、勇者は懼れず、仁勇は即ち中庸の達徳なり。達徳心に得て、然る後に屋漏に愧ぢずして、内に省みて疚しからず。此れ豈に人襲ひて取るべけんや。司馬牛は蓋し強ひて排遣する者を以て憂へず懼れずと為す。故に孔子之に告ぐるに此れを以てす。

〔語釈〕

○仁者不憂勇者不懼 『論語』子罕・28章。

○不愧屋漏 『詩経』大雅・抑の章に「爾の室に在るを相るに、尚はくは屋漏に愧ぢざれ」とある。

○襲取 『孟子』公孫丑上・2章。

○以強排遣者爲不憂不懼 『論語集注』顔淵・4章に「晁氏曰く、憂へず懼れずは徳全くして疵無きに由る。故に入るとして自得せざるは無し。実は憂懼有りて強ひて之を排遣するに非ず」とある。

〔校異〕

○斯謂之君子矣乎 『論語集注』他「斯謂之君子已乎」に作っており、また『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）も同様である。

【五】

○司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡。子夏曰、商聞之矣。死生有命、富貴在天。君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之内、皆兄弟也。君子何患乎無兄弟也。

天與命一也。此以死生富貴分言。蓋互文爾。詳見說理會編卷一。趙氏安於命而不修己、是有命而無義、聽乎天而不盡于人之說得之。○子夏四海皆兄弟之言、以司馬牛憂無兄弟、只着如此說耳。爲兄弟而憂、固是至情。既無道以使之改、徒憂亦何益哉。

〔訓読〕

○司馬牛憂ひて曰く、人皆兄弟有り、我独り亡し。子夏曰く、商之を聞く。死生命有り、富貴天に在り。君子は敬して失ふこと無く、人と恭しくして礼有れば、四海の内、皆兄弟なり。君子何ぞ兄弟無きを患へんや。

天と命とは一なり。此れ死生富貴を以て分けて言ふ。蓋し互文なるのみ。詳しくは說理會編卷一に見ゆ。趙氏の命に安んじて己を修めざるは、是れ命有りて義無し、天に聽して人を尽くさずの說、之を得たり。○子夏の四海皆兄弟の言、司馬牛の兄弟無きを憂ふるを以て、只だ此くのごとくに着きて説くのみ。兄弟の爲にして憂ふるは、固より是れ至情なり。既に道みちきて以て之をして改めしむること無く、徒らに憂ふるも亦た何の益あらんや。

〔語釈〕

○詳見説理會編卷一 『説理會編』卷一・33条に、主宰の徳という観点から言えば「天」、流行という観点から言えば「命」と言うが同じものを指している、死生富貴に天命がそれぞれ説かれていても、天と命とは同じであるから、それは互文である旨が説かれている。

○趙氏安於命く不盡于人 『論語集注大全』顔淵・5章にほぼ同文が見える。

〔校異〕

○只着如此説耳 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に「只著如此説耳」とある。

【六】

○子張問明。子曰、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣。浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂遠也已矣。

人於浸潤之譖、膚受之愬、初亦未肯遽行。然心中一種此根、隨時觸發、即是行也。既行即是明不照矣。遠者不蔽於遠、即是明字意也。

〔訓読〕

○子張明を問ふ。子曰く、浸潤の譖、膚受の愬、行はれざるは、明と謂ふべきのみ。浸潤の譖、膚受の愬、行はれざるは、遠と謂ふべきのみ。

人、浸潤の譖、膚受の愬に於いて、初めより亦た未だ肯へて遽には行はず。然れども心中一たび此の

根を種え、時に随ひて触発すれば、即ち是れ行ふなり。既に行へば即ち是れ明照らさず。遠は遠きを蔽はず、即ち是れ明の字の意なり。

【七】

○子貢問政。子曰、足食、足兵、民信之矣。

聖人所謂足食、藏富於民也。所謂足兵、寓兵於農也。集注以倉廩實言足食、武備脩言足兵。則與孟子所謂今之能臣何異哉。民信、民自相信也。亦非謂其信於我也。此蓋列三事而言耳。

子貢曰、必不得已而去、於斯三者何先。曰、去兵。子貢曰、必不得已而去、於斯二者何先。曰、去食。自古皆有死、民無信不立。

於三者之中、民力不能備兵、則且去兵。又於二者之中、民力不能備食、則且去食。終不可去者、人心之信也。孟子所謂得人心之和、得此而已。苟失人心、則米粟之多、兵革之利皆不足恃。而況於兵食皆不足乎。

〔訓読〕

○子貢政を問ふ。子曰く、食を足し、兵を足し、民之を信ず。

聖人の所謂食を足すは、富を民に藏するなり。所謂兵を足すは、兵を農に寓するなり。集注倉廩の実つるを以て食を足すを言ひ、武備の修まるもて兵を足すを言ふ。則ち孟子の所謂今の能臣と何ぞ異なら

んや。民信ずは、民自ら相信ずるなり。亦た其の我を信ずるを謂ふに非ざるなり。此れ蓋し三事を列ねて言ふのみ。

子貢曰く、必ず已むを得ずして去れば、斯の三者に於いて何をか先にせん。曰く、兵を去る。子貢曰く、必ず已むを得ずして去れば、斯の二者に於いて何をか先にせん。曰く、食を去る。古より皆死有り、民信無くんば立たず。

三者の中に於いて、民力兵を備ふること能はざれば、則ち且く兵を去る。又た二者の中に於いて、民食を備ふること能はざれば、則ち且く食しばらを去る。終に去るべからざる者は、人心の信なり。孟子の所謂人心の和を得るは、此れを得るのみ。苟も人心を失へば、則ち米粟の多、兵革の利皆恃むに足らず。而るを況んや兵食皆足らざるに於いてをや。

〔語釈〕

○集註以倉廩実く言足兵 『論語集注』顔淵・7章に「言ふところは、倉廩実ちて武備修まり、然る後教化行はれて民我を信じ、離叛せざるなり」とある。

○孟子所謂今之能臣 『孟子』告子下・9章に「今の君に事ふる者は曰く、我能く君の為に土地を辟き府庫を充たさん、と。今の所謂良臣は古の所謂民賊なり。君道に郷はず仁に志さずして、之を富まさんことを求むるは、是れ桀を富ますなり。我能く君の為に与国を約し戦は必ず勝たん、と。今の所謂良臣は古の所謂民賊なり。君道に郷はず仁に志さずして、之が為に強ひて戦はんこ

とを求むるは、是れ桀を輔くるなり」とある。

○孟子所謂得人心之和 『孟子集注』公孫丑下・1章に「人の和は、民心の和を得るなり」とある。

〔校異〕

○民力不能備食 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）は「民発不能備食」に作る。

【八】

○棘子成曰、君子質而已矣。何以文爲。子貢曰、惜乎。夫子之說君子也。駟不及舌。文猶質也、質猶文也。虎豹之鞞猶犬羊之鞞。

子貢與棘子成論文質。蓋矯其過、未見□□本末輕重之差也。夫子成以君子所重在質而文可盡無、一質可
以盡君子。是其說君子太速矣。雖駟馬不及其言之速、非謂追言之失也。及子貢以爲文質相猶、亦其語勢
宜然耳。而意則於虎豹犬羊之鞞內盡之。夫皮、質也。毛、文也。虎豹、皮之大者、則其文亦大。犬羊、
皮之小者、則其文亦小。蓋小質則有小文。大質則有大文。本不相無也。但隨其小大以爲差等、則漸進之
意、而本末輕重因亦寓焉。爲子成偏重於質、故不得不以文躋質、夫豈不知質爲文本者哉。舊說之誤、皆
起於鞞字之訓。蓋鞞、郭郭之義、只是皮也。却加去毛二字、則若專主質言矣。如此則三猶字、語意不相
協、中間必須加若盡去其文而獨存其質一語、方可說下。失子貢立言之本意矣。

〔訓読〕

○棘子成曰く、君子は質のみ。何ぞ文を以て為さん。子貢曰く、惜しいかな。夫子の君子を説くや。駟も舌に及ばず。文は猶ほ質のごとし、質は猶ほ文のごとし。虎豹の鞞は猶ほ犬羊の鞞のごとし。

子貢、棘子成と文質を論ず。蓋し其の過ちを矯むるも、未だ「其の」本末軽重の差を「失ふ」を見ざるなり。夫れ子成は君子の重んずる所は質に在りて文は尽く無かるべく、一質以て君子を尽くすべしと以ふ。是れ其の君子を説くこと太だ速かなり。駟馬と雖も其の言の速かなるに及ばず、言の失を追ふを謂ふに非ざるなり。子貢は以て文質相猶ると為すも、亦た其の語勢宜しく然るべきのみ。而れども意は則ち虎豹犬羊の鞞内に於いて之を尽くす。夫れ皮は、質なり。毛は、文なり。虎豹は、皮の大なる者なれば、則ち其の文も亦た大なり。犬羊は、皮の小なる者なれば、則ち其の文も亦た小なり。蓋し小質は則ち小文有り。大質は則ち大文有り。本相無くんばあらず。但だ其の小大に随ひて以て差等を為せば、則ち漸進の意にして、本末軽重因りて亦た寓す。子成の質に偏重するが為の故に文を以て質に躋さざるを得ず、夫れ豈に質は文の本たるを知らざらんや。旧説の誤りは、皆鞞字の訓より起る。蓋し鞞は、郭郭の義にして、只だ是れ皮のみ。却つて去毛の二字を加ふれば、則ち専ら質を主として言ふが若し。此くのごとければ則ち三猶字は、語意相協はず、中間必ず若し尽く其の文を去りて独り其の質を存すればの一語を加ふるを須ちて、方めて下を説くべし。子貢の立言の本意を失ふ。

〔語釈〕

○蓋矯其過く本末軽重之差 『論語集注』顔淵・8章に「子貢、子成の弊を矯めて、又た本末軽重

の差無く、胥な之を失ふ」とある。

○不相無 『論語集注』顔淵・8章に「文質等しきのみ。相無かるべからず」とある。

○若盡去其文、而獨存其質 『論語集注』顔淵・8章に同文が見える。

〔校異〕

○未見□□本末輕重之差 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い「未見其失本末輕重之差」とした。

【九】

○哀公問於有若曰、年饑用不足。如之何。有若對曰、盍徹乎。曰、二吾猶不足。如之何其徹也。對曰、百姓足、君孰與不足。百姓不足、君孰與足。

有若之言、與冉有爲季氏聚斂者相反。蓋孔子論爲治只是節用愛民。舍此無安民之術矣。且哀公之問、意在加賦。故有若勸行徹法。蓋恐斂重民貧則必離散、而君不得享其富耳。此實理、非迂談也。孟子之論王道皆本於此。

〔訓読〕

○哀公有若に問ひて曰く、年饑え用足らず。之を如何せん。有若對へて曰く、盍ぞ徹せざるや。曰く、二すら吾猶ほ足らず。之を如何ぞ其れ徹せんや。對へて曰く、百姓足れば、君孰と与にか足らざらん。百姓

足らざれば、君孰と与にか足らん。

有若の言、冉有の季氏の為に聚斂する者と相反す。蓋し孔子、治を為すは只だ是れ用を節し民を愛すと論ず。此れを捨てて民を安んずるの術無し。且つ哀公の間、意は賦を加ふるに在り。故に有若、徹法を行はんことを勧む。蓋し斂重く民貧しければ則ち必ず離散して、君其の富を享くるを得ざるを恐るるのみ。此れ実理にして、迂談に非ず。孟子の王道を論ずるも皆此に本づく。

〔語釈〕

○與冉有爲季氏聚斂者 『論語』先進・16章に「季氏、周公よりも富めり。而るに求や之が為に聚斂して之を附益す」とある。

○孟子之論王道 『孟子』梁惠王上・3章に「生を養ひ死を喪りて憾みなからしむるは、王道の始めなり」とある。

【十】

○子張問崇德辨惑。子曰、主忠信徙義、崇德也。愛之欲其生、惡之欲其死。既欲其生、又欲其死、是惑也。孔門實學、只是立誠、改過。學而篇言主忠信、過則勿憚改亦是此意。不如是則德不進。惑是心之動處。

惑能辨、德之所以精也。愛欲其生、惡欲其死、是爲愛□所動也。既欲其生、又欲其死、正明愛惡欲其生死□意。○觀子張問明、問崇德辨惑兩章、可以見所學漸就實矣。

誠不以富、亦祇以異。

程子曰、此當在第十六篇、齊景公有馬千駟之上。

〔訓読〕

○子張徳を崇くし惑を弁せんことを問ふ。子曰く、忠信を主とし義に従るは、徳を崇くするなり。之を愛しては其の生を欲し、之を悪みては其の死を欲す。既に其の生を欲し、又た其の死を欲するは、是れ惑なり。

孔門の実学は、只だ是れ誠を立て、過ちを改むるなり。学而篇に忠信を主とし、過ちては則ち改むるに憚ること勿かれと言ふも、亦た是れ此の意なり。是くのごとくならざれば、則ち徳進まず。惑は是れ心の動く処なり。惑能く弁ずるは、徳の精なる所以なり。愛しては其の生を欲し、悪みては其の死を欲するは、是れ愛〔悪〕の動く所なり。既に其の生を欲し、又た其の死を欲するは、正に愛悪其の生死を欲する〔の〕意を明らかにするなり。○子張明を問ひ、徳を崇くし惑を弁ずるを問ふの兩章を觀るに、以て学ぶ所漸く実に見るべし。

誠に富を以てせず、亦た祇に以て異なる。

程子曰く、此れ當に第十六篇、齊の景公馬千駟有りの上に在るべし、と。

〔語釈〕

○学而篇く勿憚改 『論語』学而・8章。

○誠不以富亦祇以異 『詩経』小雅・我行其野の第三章に「成に富を以てせず、亦た祇に異を以てす」とある。なお、顔淵・10章と読み方が異なるのは、『論語』が『詩経』の当該部分を断章取義して意味を変えている為である。

○程子曰く千駟之下 『論語集注』学而・8章にほぼ同文がある。

〔校異〕

○是爲愛□所動也 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い、「是爲愛惡所動也」とした。

○愛惡欲其生死□意 『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所）に従い、「愛惡欲其生死之意」とした。

○此當在く千駟之下 底本は「此當在第六篇、齊景公有馬千駟之下」に作る。『論語集注』顔淵・10章に「此れ錯簡なり。当に第十六篇、齊の景公馬千駟有りの上に在るべし」とあり、これに従う。

【十一】

○齊景公問政於孔子。孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子。公曰、善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾得而食諸。

君而盡君道、則臣亦臣矣。父而盡父道、則子亦子矣。重爲君、爲父而言。此孔子警齊景公之本意。

〔訓読〕

○齊の景公、政を孔子に問ふ。孔子対へて曰く、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり。公曰く、善きかな。信に如し君君たらず、臣臣たらず、父父たらず、子子たらざれば、粟有りと雖も、吾得て諸を食らはんや。

君にして君の道を尽くせば、則ち臣も亦た臣なり。父にして父の道を尽くせば、則ち子も亦た子なり。君たり、父たるを重んじて言ふ。此れ孔子、齊の景公を警しむるの本意なり。

【十二】

○子曰、片言可以折獄者、其由也與。子路無宿諾。

片言、言未盡也。言未盡而獄即爲其所折、子路信在言前、人信之也。胡氏曰、折者、析而二之也。治獄之道、兩辭具備、曲直未分、混爲一區、及乎別其孰爲曲直、判然兩途。所謂折也。其義得之。

〔訓読〕

○子曰く、片言以て獄を折むべき者は、其れ由なるか。子路、諾を宿むること無し。

片言は、言未だ尽くさざるなり。言未だ尽くさずして獄は即ち其の折むる所と爲るは、子路の信言前に在りて、人之を信ずればなり。胡氏曰く、折むとは、析きて之を二つにするなり。獄を治むるの道は、

両つの辞具に備はり、曲直未だ分かれず、混じて一区と為る、其の孰れか曲直を為すかを別つに及びて、判然と途を兩つにす。所謂折なり、と。其の義之を得。

〔語釈〕

○胡氏曰く所謂折也 『論語集註大全』顔淵・12章に同文が見える。

【十三】

○子曰、聽訟吾猶人也。必也使無訟乎。

詳見大學私存。餘意楊氏能發之。

〔訓読〕

○子曰く、訟を聴くこと吾猶ほ人のごとし。必ずや訟無からしめんか。

詳しくは大學私存に見ゆ。余意は楊氏能く之を發す。

〔語釈〕

○詳見大學私存 『大學私存』「聽訟吾猶人也。必也使無訟乎」の注参照。

○餘意楊氏能發之 『論語集註』顔淵・13章に「楊氏曰く、子路は片言以て獄を折むべきも、礼遜

を以て国を為むることを知らざれば、則ち未だ民をして訟無からしむること能はず。故に又た孔子の言を記して以て聖人は訟を聴くを以て難しと為さず、民をして訟無からしむるを以て貴しと

為すを見すなり」とある。

【十四】

○子張問政。子曰、居之無倦、行之以忠。
忠、即所居於心之誠也。

〔訓読〕

○子張政を問ふ。子曰く、之に居りて倦むこと無く、之を行ふに忠を以てす。
忠は即ち心に居る所の誠なり。

【十五】

○子曰、博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫。
已見雍也篇。但此無君子二字。

〔訓読〕

○子曰く、博く文を学び、之を約するに礼を以てすれば、亦た以て畔かざるべきか。
已に雍也篇に見ゆ。但だ君子の二字無し。

〔語釈〕

【十六】

○子曰、君子成人之美、不成人之惡。小人反是。

君子之於善惡、非徒好惡之而已。於成與不成、見其與人成善之意。不成人之惡、亦使可以爲善也。

〔語釈〕

○子曰く、君子は人の美を成し、人の悪を成さず。小人は是れに反す。

君子の善惡に於ける、徒だに之を好惡するのみに非ず。成すと成さざるとに於いて、其の人と善を成すの意を見ず。人の悪を成さざるも、亦た以て善を爲すべからしむるなり。

【十七】

○季康子問政於孔子。孔子對曰、政者正也。子帥以正、孰敢不正。

此見政不在於正人也。

〔訓読〕

○季康子政を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、政は正なり。子帥いるに正を以てすれば、孰か敢へて正しからざらん。

此れ政は人を正すに在らざるを見すなり。

【十八】

○季康子患盜問於孔子。孔子對曰、苟子之不欲、雖賞之不竊。

在上者不欲、則民恥於欲而自不竊。蓋我無欲而民自正之意、欲人皆以德化民也。夫化民之本在德而不在

政刑。故以不欲言之。非謂去盜專於清靜也。

〔訓読〕

○季康子盜を患ひて孔子に問ふ。孔子對へて曰く、苟くも子の欲せざる、之を賞すと雖も竊まず。

上に在る者欲せざれば、則ち民欲を恥じて自ら竊まず。蓋し我欲すること無くして民自ら正すの意にして、人皆徳を以て民を化することを欲するなり。夫れ民を化するの本は徳に在りて政刑に在らず。故に欲せずを以て之を言ふ。盜を去るに清靜を専らにすと謂ふに非ず。

【十九】

○季康子問政於孔子曰、如殺無道以就有道、何如。孔子對曰、子爲政焉用殺。子欲善而民善矣。君子之徳

風、小人之徳草。草上之風必偃。

○此章專爲殺字而發。欲善而民善、則民皆樂生矣。上失其道民散久矣。而欲以殺爲治。有不忍人之心者、

何忍言邪。

【訓読】

○季康子政を孔子に問ひて曰く、如し無道を殺して以て有道に就かしむれば、何如。孔子対へて曰く、子、政を為すに焉んぞ殺を用ひん。子善を欲して民善なり。君子の徳は風、小人の徳は草。草之に風を上ふれば必ず偃す。

○此の章専ら殺字の為にして発す。善を欲して民善は、則ち民皆生を樂しむなり。上其の道を失ひて民散ずること久し。而るを殺を以て治を為さんと欲す。人に忍びざるの心有る者、何ぞ言ふに忍びんや。

【語釈】

○不忍人之心 『孟子』公孫丑上・6章に「人皆人に忍びざるの心有り。先王人に忍びざるの心有りて、斯に人に忍びざるの政有り。人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行へば、天下を治むること、之を掌の上に運らすべし」とある。

【二十】

○子張問、士何如斯可謂之達矣。子曰、何哉、爾所謂達者。子張對曰、在邦必聞、在家必聞。子曰、是聞也、非達也。夫達也者、質直而好義、察言而觀色、慮以下人。在邦必達、在家必達。夫聞也者、色取仁而行違、居之不疑。在邦必聞、在家必聞。

質直者、以直爲質也。直即忠信之德、而好義則徙義之意也。察言觀色、慮以下人、此直義見於接物者也。色取仁而行違、居之不疑、與鄉愿同。

【訓読】

○子張問ふ、士は何如なれば斯ち之を達と謂ふべき。子曰く、何ぞや、爾の所謂達とは。子張対へて曰く、邦に在りても必ず聞こえ、家に在りても必ず聞こゆ。子曰く、是れ聞なり、達に非ざるなり。夫れ達なる者は、質直にして義を好み、言を察して色を觀、慮りて以て人に下る。邦に在りても必ず達し、家に在りても必ず達す。夫れ聞なる者は、色仁に取りて行違ひ、之に居りて疑はず。邦に在りても必ず聞こえ、家に在りても必ず聞こゆ。

質直とは、直を以て質と爲すなり。直は即ち忠信の徳にして、義を好むは則ち義に徙るの意なり。言を察して色を觀、慮りて以て人に下るは、此れ直義の物に接するに見るる者なり。色仁に取りて行違ひ、之に居りて疑はざるは、郷愿と同じ。

【二十一】

○樊遲從遊於舞雩之下。曰、敢問崇德脩慝辨惑。子曰、善哉問。先事後得、非崇德與。攻其惡、無攻人之惡、非脩慝與。一朝之忿忘其身、以及其親、非惑與。

此與前章子張問崇德辨惑意同。可見孔門學者實用力處惟在於此。崇德本也。不知治己、而惡匿於心、則

德無由崇。不知懲忿、而心爲所惑、則無由知惡也。忿時常忘其身、則必致禍。禍及其親、豈可不戒。故凡言忿者、必曰懲。以忿則禍所必及也。樊遲蓋有憤世嫉邪之心。故告之如此。觀先事後得之言、則舞雩之間、當與聞先難後獲之教同時。但德謂之崇、則此間似爲稍後耳。詳見說理會編卷十二。

〔訓読〕

○樊遲從ひて舞雩の下に遊ぶ。曰く、敢へて徳を崇くし慝を修め惑を弁ぜんことを問ふ。子曰く、善きかな問ひや。事を先にし得るを後にするは、徳を崇くするに非ずや。其の悪を攻めて、人の悪を攻むること無きは、慝を脩むるに非ずや。一朝の忿に其の身を忘れ、以て其の親に及ぼすは、惑に非ずや。

此れ前章の子張徳を崇くし惑を弁ぜんことを問ふの意と同じ。孔門の学者実に力を用ふる処は惟だ此に在るを見るべし。徳を崇くするは本なり。己を治むるを知らずして、悪心に匿るれば、則ち徳由りて崇くすること無し。忿を懲らすを知らずして、心惑はず所と為れば、則ち由りて悪を知ること無し。忿時に常に其の身を忘るれば、則ち必ず禍を致す。禍の其の親に及ぶ、豈に戒めざるべけんや。故に凡そ忿を言へば、必ず懲らすと曰ふ。忿は則ち禍必ず及ぶ所なるを以てなり。樊遲は蓋し世を憤り邪を嫉むの心有り。故に之に告ぐるごとくのごとし。事を先にし得るを後にすの言を觀れば、則ち舞雩の間ひは、當に難きを先にし獲るを後にすの教を聞くと時を同じくすべし。但だ徳之を崇くすと謂ふは、則ち此の間稍後たるが似きのみ。詳しくは說理會編卷十二に見ゆ。

〔語釈〕

○前章子張く崇徳辨惑 『論語』顔淵・10章。

○先難後獲之教 『論語』雍也・20章。

○詳見説理會編卷十二 『説理會編』卷十二・14条では、『論語』中の樊遲と孔子の問答はどの順序で行われたかが考察されている。まず樊遲自身の「世を憤り、邪を嫉む」心を懲らさなくては、善悪を認識することすら出来ないのでは、工夫が成立しないと考える季本は、胡氏注を批判しながら雍也・20章、本章、子路・19章の順序で問答されたと主張する。

【二十二】

○樊遲問仁。子曰、愛人。問知。子曰、知人。樊遲未達。子曰、舉直措諸枉、能使枉者直。樊遲退。見子夏曰、郷也吾見□夫子而問知。子曰、舉直措諸枉、能使枉者直。何謂□。子夏曰、富哉言乎。舜有天下、選於衆、舉皐陶、不仁者遠矣。湯有天下、選於衆、舉伊尹、不仁者遠矣。

當樊遲未達、乃蒙知人而發。謂有所分別、則不能兼愛也。及聞夫子之言、似無可疑。而復問於子夏者、蓋樊遲於知上起念。故曰見於夫子而問知。蓋以舉直措枉之言、主於分別是非也。殊不知所謂直者乃仁人也。舉直、則以能愛人之人、使之感化人之不直者。其所重實在仁焉。子夏指不仁者遠矣言之、以見所舉者仁、而夫子之言不止言知矣。詳見説理會編卷七。○爲政篇舉善而教不能則勸、與此章意亦略同。

〔訓読〕

○樊遲仁を問ふ。子曰く、人を愛す。知を問ふ。子曰く、人を知る。樊遲未だ達せず。子曰く、直きを挙げて諸々の枉れるに〔錯〕けば、能く枉れる者をして直からしむ。樊遲退く。子夏を見て曰く、郷に吾夫子に見えて知を問ふ。子曰く、直きを挙げて諸々の枉れるに〔錯〕けば、能く枉れる者をして直からしむ。何の謂ひぞ〔や〕。子夏曰く、富めるかな言や。舜は天下を有つに、衆より選びて皐陶を挙げ、不仁者遠ざかる。湯は天下を有つに、衆より選びて伊尹を挙げ、不仁者遠ざかる。

樊遲未だ達せずに当たりては、乃ち人を知るに蒙くして発す。分別する所有れば、則ち兼愛すること能はざるを謂ふなり。夫子の言を聞くに及び、疑ふべきこと無きが似し。而れども復た子夏に問へるは、蓋し樊遲知上に於いて念を起こせばなり。故に夫子に見えて知を問ふと曰ふ。蓋し直きを挙げて枉れるに錯くの言を以て、是非を分別するを主とす。殊に所謂直なる者は乃ち仁人なるを知らざるなり。直きを挙ぐるは、則ち能く人を愛するの人を以て、之をして人の直からざる者を感化せしむるなり。其の重んずる所は実に仁に在り。子夏は不仁者遠ざかるを指して之を言ひ、以て挙ぐる所の者は仁にして、夫子の言は知を言ふに止まらざるを見すなり。詳しくは説理會編卷七に見ゆ。○為政篇善を挙げて不能を教ふれば則ち勸むは、此の章の意と亦た略同じ。

〔語釈〕

○説理會篇卷七 『説理會編』卷七・11条に、当該章に関するこれと同じような議論がある。

○為政篇舉善而教不能則勸誘 『論語』為政・20章。

〔校異〕

○舉直措諸枉 後段の季本注では「措」は「錯」となっており、また諸本いずれも「錯」であることから、これに従った。

【二十三】

○子貢問友。子曰、忠告而善道之。不可則上。無自辱焉。
忠告、可謂信於己矣。忠告善道之而不可、在友猶未信也。君子雖止而不諫、亦必當反求其所以不信乎友者矣。

〔訓読〕

○子貢友を問ふ。子曰く、忠告して善く之を道くみちび。不可なれば則ち「止む」。自ら辱めらるること無し。
忠告は、己を信にすと謂ふべし。忠告して善く之を道くも不可なるは、友に在りて猶ほ未だ信ぜざればなり。君子は止めて諫めずと雖も、亦た必ず当に其の友に信ならざる所以の者を反求すべし。

〔語釈〕

○不可則上 『論語集注』他に基づいて改めた。

【二十四】

○曾子曰、君子以文會友、以友輔仁。

學只從文上講求。而所講之文、則從仁體上發。故曰輔仁。

〔訓読〕

○曾子曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く。

学は只だ文上より講求す。而して講ずる所の文は、則ち仁体上より発す。故に曰く、仁を輔く、と、

論語私存卷十二終